

### 第3回宮城県産業教育審議会 会議概要

日 時 令和4年1月26日（水）午前10時から正午  
場 所 宮城県行政庁舎 4階 特別会議室  
出席委員 今野委員，大内委員，高橋委員，伊藤委員，佐藤委員，梨本委員，梅津委員，  
大庭委員，徳能委員 以上9名出席（敬称略）  
（欠席）三浦委員，後藤委員，宮原委員 以上3名  
県出席者 伊東教育長，遠藤副教育長，遠藤高校教育課長，佐藤副参事兼総括課長補佐，  
後藤総括課長補佐，他関係職員（事務局）

#### 1 開 会

#### 2 開会あいさつ

- ・ 宮城県教育委員会 伊東教育長
- ・ 宮城県産業教育審議会 伊藤会長

#### 3 報告（議長：伊藤会長）

##### （1）第2回審議会及び第3回専門委員会報告について

**資料2—1**に基づき，事務局より報告

[事務局より]

- 第2回産業教育審議会 令和3年11月26日（金）開催。その会議概要に基づき報告
- ※ 前回の審議会で欠席者も多かったことから，前回審議会の説明
- 協議において事務局より2点提案。
- 1点目は，これまでの審議会，専門委員会，質問紙調査から専門委員会で審議，答申に向け4つの論点について抽出・整理し，（1）社会の変化に対応した人材育成について，（2）地域や産業界と連携した産業教育について，（3）専門高校・職業教育の理解促進について，（4）今後のさらなる少子化を踏まえた産業教育の在り方について提案。
- 審議会委員から，4つの論点に関する整理について承認。その上で，専門高校・職業教育の理解促進，特にオープンキャンパスを中心に意見をいただく。高校での中学生及び保護者等の受入れの実態，開催頻度，また，その評価について質問があった。
- 回答として，事務局よりオープンキャンパスは高校の理解を深める良い機会と捉えており，開催頻度についても，これまで年1回開催の学校が多かったが，部活動体験等を含め，複数回開催する学校が増えていること，昨年度，今年度と新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から，思うように実施できない部分はあったものの，動画配信やホームページなど，各学校が様々な工夫を凝らし実施している点について説明。
- さらには，オープンキャンパスについて，中学生も楽しかったなど評価は高

いが、なかなか進路選択に繋がらないのが現実。中学生はもちろん保護者についても、専門高校のことをよく知らない状況にあり、普通高校であれば入学して、普通教科を学び、進学するというイメージで分かりやすいが、専門高校の進路については分かりにくいいため、その辺りを明確に示すべきという意見をいただいた。

- 関連して、専門高校も共通教科の指導がたくさんあり、2，3年生から専門科目が増えてくるが、教育課程表だけを見るとどこも同じに見えるので、中学生にとって分かりやすく、選択しやすい工夫が必要など、いずれも分かりやすさという点について意見をいただいた。
- また、専門学校に入学した場合の卒業後の進路については、必ずしも工業高校を出たので製造，建築土木系，商業高校からビジネス系というわけではなく、医療系や福祉系など、進路を考えて変更する生徒もいる。このような状況を考えると、基礎学力，基本的な職業能力など，基礎的・基本的な資質・能力の育成が必要になるという意見もいただいた。
- 審議会委員が育ってきた時代のキャリアパスと現状は随分異なっており，社会が多様化すると，キャリアパスも多様化し見えにくくなっている。その中で，産業教育をどうしたらいいのかということが，様々な問題を生じさせている，そのようなことを答申の前段で触れなければならないという意見もいただいた。
- 提案された「答申に向けた4つの論点の抽出・整理」については，多くの意見や希望，要望等があり，幅広い様々な意見があった中で，2回の専門委員会を経て，今回提案の4つの論点の抽出は，過不足なくうまくまとまっている印象を受けたという意見をいただき，「答申に向けた4つの論点」については，特に審議会委員の皆様から異論はなかった。
- 2点目の提案として，（2）答申（素案）骨子（案）について，諮問内容の確認を行った上で，協議の1つ目の4つの論点に基づき，構成した骨子（案）について提案。
- 答申の構成については，「第1章 本県産業教育を取り巻く現状と課題」，「第2章 これからの本県産業教育の在り方」，「第3章 各学科における学びの在り方」，「第4章 今後のさらなる少子化を踏まえた産業教育の在り方」の4つの章立てとした構成を事務局より提案。
- 協議1つ目に提案した4つの論点については，第2章及び第4章に反映させることも併せて説明。
- 委員からの主な意見として，共通の学び，倫理観の醸成や基礎学力の重要性について意見があった。
- さらに，教員の指導力の向上と併せて，様々な連携の取組や6次産業化への対応を含め，先生方の負担に対する意見をいただいた。通常の授業を行いながら，教員自身の資質・能力向上のための研修への参加や連携のための企画立案，斡旋，実施など教員の負担が大きいことから，コーディネート機能を持つような専門職の位置付け，配置が必要であるという意見や例として示さ

れたのは農業における就農について、東京証券取引所の人材育成塾のプログラムの活用など、民間企業のプログラムを活用することでの学校、教員の負担軽減の方策などの話もあった。

- また、連携においては本来の学びと連携の学びがかけ離れないように、本来学ぶべきものが何であるのか、学びを発展させるために連携があり、教科の学びの中に、連携をしっかりと位置付ける必要があるという意見もいただいた。
- 倍率の問題についても意見をいただいた。倍率が低い、定員を満たしていないから、専門高校の学びを閉じていくということに対して、産業教育審議会として、答申に入れるべきではないかという意見があった。地域にバランスよく、専門教育をきちんと成り立たせていく、宮城県としての方向性を示していかないと、産業人材が先細っていく、倍率だけではないところの立ち位置、守るべきことについて答申の中で表現してほしいという意見もいただいた。
- また、関連して、今後の産業教育における専門学科構成について、登米総合産業高校などがあるが、産業人材を専門高校で養成していくという観点から、県全体の専門高校の在り方を考える必要があるのではないかと、職業教育拠点校方式でいくのであれば、順次ではなく、県全体やブロックごとの拠点校と、その拠点校の下で地域に特化した専門高校をつくっていくなど、大方針も必要ではないかなどの意見もあった。
- さらに、ICTについては、情報学科の設置の検討の必要性、学科を設置しないのであれば、各専門高校に情報の専門教員をきちんと配置し、ICTをきちんとできる人材の育成を行うことも重要ではないかという意見もいただいた。
- 人口が減少して少子化が進む中で、今のままの専門高校でいいということは、誰も考えておらず、どのような編成の仕方があるのか、地域経済との関わりもあるが、絶えず議論しながら、必要に応じて取り組んでいかなければならないという意見をいただいた。
- 答申（素案）骨子（案）については、構成等に対する異論はなかったが、答申作成にあたっては、今後、審議会委員及び専門委員会委員の意見を反映しながら、答申（案）を作成することで了解を得た。

さらに、**資料2—2**に基づき、事務局より報告

[事務局より]

- 第3回専門委員会を12月21日（火）開催。その会議概要に基づき報告。
- 協議において事務局より、答申（素案）について提案。
- 審議会です承を得た答申（素案）骨子（案）に基づき、答申（素案）を提案。
- 事務局より、章立て、項目立て、記載内容について説明。
- 専門委員会からの主な意見として、その時代時代の変化に対応した教育課程を編成しながら取り組む必要があること、どのような人材を社会に送り出す

かが産業教育の中では非常に重要であること、今後の産業教育の在り方については、自分の学校だけで完結することなく、高等教育機関、民間と連携が必要という意見をいただいた。

- 県内には多くの優良企業があり、大企業やネームバリューなどの価値観に固執するだけではない、キャリア教育の必要性について意見をいただいた。
- 特に、キャリア教育という点において、社会に出る直前の高校段階の指導に留まらず、義務教育段階から産業教育の理解を深める教育の必要性や、そのために知事部局の産業人材対策課等との連携などに関する意見をいただいた。
- 義務教育段階からキャリア教育の充実を図るためには、オープンキャンパスの在り方に関連し、オープンキャンパスへの中学校教員の参加率の低さも話題となった。大学で実施している学校、学科の説明会を先生方に行う機会の必要性についても意見をいただいた。
- また、地域づくり、まちづくり、地域の活性化への取組について、高校生が地元就職し、宮城県内で生活の基盤をつくっていくことが、結果的に地域づくり、持続可能な社会ということにつながるという意見をいただいた。
- さらに、これから人口減少が進み子供が少なくなっていく中で、高校進学する子供たちに選んでもらうためには、スクール・ミッション、スクール・ポリシーにより、しっかりと学校の理念を明確にし、その理念に基づく、教職員、生徒の活動をしっかりと発信すべきという意見もいただいた。
- 専門学科・専門高校で様々な取組をしながら、充足率に結びついていないことについて、在籍している生徒が、専門学科・専門高校の学びに対して誇りを持つこと、誇りを持てる状況をいかにつくっていくか、また、社会全体の学力的なヒエラルキー（序列）の払拭をいかにすべきかという視点で意見をいただいた。実際に普通高校出身の生徒、専門高校出身の生徒が混在する大学において、専門高校の学びを武器に生き生きと大学生活を送っている生徒の事例を踏まえた話もいただいた。

**【審議会委員会からの質問・意見は特になし】**

#### 4 協議

##### (1) 答申（素案）について

**資料3**に基づき、事務局より説明

**[事務局より]**

- 第2回専門委員会で、審議会委員及び専門委員会委員の意見、質問紙調査の結果を踏まえ、4つの論点として抽出、整理した内容に基づき、第2回産業教育審議会において、資料3答申（素案）骨子（案）として提案。
- まず、諮問の内容について、『今後の産業教育の在り方について』
  - 1 今後の少子化などの社会状況の変化に対応した専門教育の在り方について
  - 2 予測困難な時代に求められる資質・能力を育成する専門学科構成について これらを念頭に答申の構成として、

- 「はじめに」，国や社会，県の動きについて，審議の論点及び経緯について記載。
- 章立てについては，4つの章で構成し，「第1章 本県産業教育を取り巻く現状と課題」とし，「1 本県産業教育の現状」，「2 本県産業教育の課題」，学科の設置状況や入試状況などデータに基づく記載。
- 「第2章 これからの本県産業教育の在り方」とし，抽出・整理した4つの論点うち，第2章では，「1 社会の変化に対応した人材育成」，「2 地域や産業界等との連携」，「3 専門高校・職業教育の理解促進」の3つの論点を反映させる内容とし，この部分が諮問の1つ目に対応した内容となる。
- 「第3章 各学科における学びの在り方」として，第1章及び第2章を踏まえ，今後のそれぞれの学科での学びの在り方について，質問紙調査結果の分析及び考察を行い，今後，専門委員会及び事務局で原案を作成する旨，説明。
- 「第4章 今後のさらなる少子化を踏まえた産業教育の在り方」として，抽出した4つの論点の4つ目，「第3章 各学科における学びの在り方」において，今後の学びの方向性を示した上で，さらなる少子化などの影響により，これから産業教育の在り方を考える際に，必要となってくることが予想される専門学科の構成等について，資料に記載内容のとおりであるが，中長期的視点に立った検討も必要と考えた。この部分が諮問の2つ目に対応した内容となる。
- そして，「おわりに」として，今後の望ましい産業教育とし，資料3 答申（素案）骨子案を第2回産業教育審議会にて提案，了承を得た構成に基づいて，答申（素案）を事務局で作成し，第3回専門委員会で提案。

#### **資料4**に基づき，事務局より説明

##### **[事務局より]**

- 資料3 答申（素案）骨子（案）に基づく，資料4 答申（素案）。第3回専門委員会で提案，専門委員会の意見を反映し，事務局で整理した内容となる。
- 国や社会，県の動き，また，これまでの産業教育審議会における審議経過等について，まとめたものである。
- 「第1章 産業教育を取り巻く現状と課題」について，「1 本県産業教育の現状」として，学科の設置状況，進路状況，入試状況などデータに基づく内容及び産業社会の変化を記載。
- 「2 本県産業教育の課題」として専門委員会からの変更になるが（1）専門学科・専門高校の課題，（2）社会の動向や産業構造の変化への対応，（3）少子化による生徒数減少への対応について，県及び教育企画室からのデータに基づき記載。
- 「第2章 これからの本県産業教育の在り方」とし，この部分にこれまで審議会，専門委員会で皆様からいただいた意見により，4つの論点を抽出・整理，意見を反映させた部分である旨，説明。

- 「1 社会の変化に対応した人材育成」，（1）生徒の資質・能力の育成とし，①専門学科・専門高校で求められる基礎的・基本的な資質・能力の育成について，社会の急激な変化に伴い，期待される資質・能力も変わってきているが，学びの基盤となる基礎学力の定着，実践等を踏まえた基礎的・基本的な資質・能力の育成が必要であること，ふるさと宮城への愛着や誇り，課題解決能力，グローバル化への対応，コミュニケーション能力の育成について記載。
- ②次代の産業を担う人材に必要とされる資質・能力の育成として，Society5.0 社会への対応，ICT活用能力等，スペシャリスト育成，ゼネラリスト育成，起業家精神の育成，SDGsの担い手の育成について記載。
- （2）教員の指導力向上では，生徒に必要とされる資質・能力の育成に対応するためには，教員自身が Society5.0 時代における職業人に必要な専門的知識や技術の習得，ICTを活用した実践的指導力の向上について，また，それらスキルの向上を図ることができる機会の確保の必要性，さらに，様々な連携を行う上で，必要となるコーディネート力，ファシリテーション力，マネジメント力のスキル向上の必要性を記載。一方で，教員の負担に対する懸念についても意見があったことから，コーディネート機能を持つ，専門人材の配置の必要性についても記載。
- （3）産業教育に必要な施設・設備の整備については，スマート社会に対応した教育課程の実現に向けた施設・設備の整備，今年度，国の補正予算において整備を進めている「スマート専門高校事業」によって，デジタル機器の整備が進み，新たな学びが可能となるなど記載。
- 「2 地域や産業界等との連携」，（1）産業界・高等教育機関等との連携，①産業界・高等教育機関等との連携では，地域の持続的な成長を支える職業人を担っていくために，これまでの連携の取組からのステップアップ，加えて，自分の学校だけではなく，産業界，高等教育機関の施設・設備等の活用などに関する連携について記載。
- ②地域協働・地域活性化の推進では，地域課題解決等の探究的な取組，持続可能な社会や環境への貢献活動，地域の伝統文化・技能の継承に係る連携について記載。
- ③学科間連携・学校間連携については，小中学校との連携，学科間連携，学校間連携など，これまで以上に急激な社会構造の変化に対応するためには，それぞれの学校だけでの完結ではなく，様々な連携の必要性について記載。
- 「3 専門高校・職業教育の理解促進」の方策として（1）時代のニーズを踏まえた教育課程の充実とし，①スクール・ミッション/ポリシー策定及び運用については，期待する各高校の存在意義や社会的役割など分かりやすく，学校の役割や理念を示すことの必要性について記載。
- ②急激な社会の変化に対応できる教育課程編成「社会に開かれた教育課程」として，変化への対応について，「社会に開かれた教育課程」の実現のため，地域や産業界，関係団体が参画した教育課程等の検討も連携の視点の重要性

- について記載。
- ③キャリア教育の充実－志教育の推進－とし記載。この部分については、資料3の答申（素案）骨子（案）の項目立てから変更している。
  - （2）魅力を伝える方策では、①専門教科の学びや職業に関する理解を深める機会の創出と提供、②多様なツールを活用した情報発信やPR動画等の制作について記載。
  - 「第3章 各学科における学びの在り方」「2 主な学科の学び」について、（1）農業から（7）福祉までは現在、専門委員会及び事務局で調整、作成中のため、今回は項目立てのみ記載。
  - 「第4章 今後のさらなる少子化を踏まえた産業教育の在り方」については、「1 これからの産業教育における専門学科構成」として、（1）各学科の学びの連携と融合とし、①専門学科、②総合学科、③職業教育拠点校について、それぞれの今後の在り方について記載、さらに、（2）新たな産業の創出を視野に入れた学びとして記載。
  - 「2 長期的視点に立った学びの在り方」、（1）地域づくりと産業教育、（2）キャリア形成の変更への対応－高校卒業後（18歳以降）の学び－とし、リカレント教育について、外部機関との関りもあることから、キャリア形成に関連付けた内容で記載。
  - 「おわりに」として、今後の望ましい産業教育として最後にまとめたいと考えており、それ以降については、資料編としている。

#### [委員からの質問] (◎質問 ●回答 ○意見)

- ◎ 事務局からの説明の中で、第3章について専門委員会及び事務局で調整中とのことであるが、最終答申（案）前に、審議会委員が確認する時間をどのように考えているか。
- 第3章の調整後、必要に応じて専門委員会の開催も検討し、審議会委員の皆様にはメール等で送付、意見をいただきたいと考える。
- ◎ 事前に資料を拝見し、若干気になった点について確認させていただきたい。資料2-2、第3回専門委員会報告において、座長が最後の方に、産業高校や産業教育にヒエラルキーのような視点ということは全く意味のないことだという指摘があったが、その辺りは今回の答申（素案）の中でどこかに触れるような記述はあるか。
- 今回の答申（素案）において、触れてはいない。そのような点も含め、本日も意見をいただきたいと考える。

#### [審議会委員からの意見]

- 私自身の感想だが、ヒエラルキーという言葉は敢えて使う必要はないと思うが、この指摘は保護者や社会が産業教育というものを、適切に理解する必要があるという指摘と受け止めた。そのような意味で、これまで専門委員会の議論、それから本審議会での議論でも、産業教育や各専門高校で行っている

ことを、中学生や保護者にきちんと説明する必要がある。同時にこれからの社会、卑近な話では最近、卒業生やこれまで関わってきた若い人達から転職の相談を受けることがある。これまで事務系の仕事をしてきた人が行き詰まりを感じて異なるものづくりに転職したいが、どのように対応すべきかなどという相談を受けることが増えてきている。リカレント教育もそうであるが、そのような転職支援に産業教育がどのように関われば良いかなどにも触れるところがあるといいと思っている。

- ヒエラルキーという言葉を使うかどうかという話があったが、専門高校で学ぶことの意義を学校関係者や生徒だけではなく、特に保護者などに、きちんと示していくことは、すごく大事なことだと思っている。そのような意味で、生徒たちが誇りを持てるように、高校でどのようなことを学んでいるのかという実態がはっきりと見えるようにしていくことが大事だと思う。

資料4の第3章、作業がこれからということだが、ここに期待したい。今のうちに私の考えを申し上げておきたい。特に、第3章の「1 専門学科における共通の学び」のところで、いかに魅力的な学びが専門高校でできているかを示すことが大事だと思う。具体的には、第2章の「1 社会の変化に対応した人材育成」、特に生徒の資質・能力でどういう力を身に付けるかということももちろん大事であり、そのために教員の指導や設備を整えることももちろん大事である。或いは第2章の2で様々なところと連携したりしていくことも大事であり、組み立てからはこのようになっているが、10ページに魅力を伝える方策というところがあるが、魅力を伝える以前に、どういう魅力があるのかについて、今まで取り組んできたことの意味を再確認するとともに、不十分であれば新しい魅力をどのようにつくっていくかということがあっての魅力の発信だと思うので、その魅力がどうなのかということも第3章の1で具体的に示すべきではないかと思った。

- 1つは普通科の学びと比べて何が違うのか、普通科はどうしても受験などに向けての教科の学びということがあり、学校にもよるため一般化することは難しいが、何のために、何の役に立つのかよくわからないがテストのために学ぶということだと、高校生も面白いと思っ学んでいる訳ではないかもしれない。或いは、それが社会全体の中で、どのように位置付けられているかということも検討の余地はあるが、学ぶことの意味が見え難い学びに対して、むしろ専門高校では社会の実態に即した学びであり、これからの社会をつくっていく、自分が就職するというだけに限らず、様々な人を喜ばせたり、新しく活気のある社会になっていくために、いろいろなものをつくっていくということに、高校での学びが直結していることを感じることで、達成感も得られると思うし、そして学ぶことがただ単に教室の中だけの話ではなく、すでに多くの学校が取り組んでいると思うが学んだ成果を様々な地域の方、産業界の方々に発信することで、高校生の学びが外部から評価され、認めってもらうことで、達成感も感じられるのではないかと思う。そこが普通科と違う学びによる嬉しさや、やりがいを感じられるということが一つの魅力なので

はないかと思う。それから、もう一つは地域や産業界との連携ということに含まれると思うが、様々な分野で活躍する魅力的な人と多く出会えること、これも教科書だけを学んで知識を身に付けても、あまり学ぶことの意味が見出しにくいかもしれないが、様々な世界で活躍する例えば自分よりも5年上、10年上の若者達、或いは20年以上の先輩達がどのような分野でどのような人が活躍しているか、自分もこういう大人になりたい、自分がこういう道に進んでみたいと思えるようなチャンスが、専門高校の学びには含まれていることが、一例だが、そのような課題解決型、探求型の学びが専門高校の魅力であることを、示していくことで生徒たちが誇りに思える専門高校に繋がると思った。

- リカレント教育の話も出たが、第4章の最後にリカレント教育について少し記載されているが、ここの部分をどのように捉えるのかがやや見えにくい。今後の産業教育の在り方についてというテーマでの答申のため、専門高校・専門学科だけの話ではなく、むしろ就職した後、働いている人間の再教育、リカレント教育ということ、この答申の中にもう少し入ってもいいテーマとえている。広げ過ぎないようにポイントを絞ることも一つの考え方だと思うが、どれだけ答申の内容に盛り込むかは別としてリカレント教育のところは、どのように意識していくかが非常に大事だと思っている。14ページに高校卒業後に産業教育を学ぶ場として、様々なものが挙げられているが、そのようなことが専門高校との関連でもう少し明確に示したらよいのではないかと思った。専門高校では就職前の若者を対象として、また、卒業後は別のところでということだけではなく、先ほどの話と結びつくが既に働いている働き盛りの人たちが、高校生と一緒に学んで、それが高校生にも刺激になれば、或いは働き盛りの人間にとっても高校生と関わることで、刺激になりお互いにとっての意味もあると思う。リカレント教育のところをもう少し踏み込んで記載していくことで、それが専門高校の魅力ということにも繋がっていくと思った。
- まず、資料全体としては、前回も審議会に参加した時の報告と、そのあとの第3回専門委員会の報告を見比べ、専門委員会の方では、現場にいる先生方の意見は具体的な要望があり、また、先ほどヒエラルキーの話でもあったが、非常に参考になると思った。それを受け、この答申の素案は、前回に引き続き、本当に不足なく非常によくまとめられている印象である。非常に盛りだくさんでこんなにも多くのことが望まれ、いろいろな人材を育成しつつ、教員にも望まれることが多く大変であると感じる。もう一方では目指すところはこういうところにあると思ひ、答申のまとめという意味合いでは、今の段階ではよろしいのではとないかと思っている。
- 細かい点では、例えば「第3章各学科における学びの在り方」は、人材育成という意味合いで基本的には非常に多様な能力を持った子供達を教育しつつ、加えて、専門性や特色を持たせるという意味合いでも、非常にまとめ方が難しいと感じている。例えば、具体的は、主な学科の学びで農業、工業、

商業，水産，家庭，看護，福祉では結局は①生徒の資質，②関係機関との連携③教科の魅力化という項目に必ず含まれるところであり，これを共通の学びとするのか，各学校の学びとして残すのか，どちらがいいかということが正直，思い悩むところである。

- 今更ではあるが，各学科を見たときに，農業，工業，商業，水産，家庭，看護，福祉とあるが，一般的に「家庭」というネーミングは，時代遅れになりつつあると考える。家庭とは何を学ぶところなのか。例えば大学でも今，家政学部という言い方はせず，生活や生活経営など，イメージが変わってきていると思う。今回の答申でということではないが，将来的には考えるところだと思っている。
- 最後の資料も大変参考になり，年明け早々に今年の新成人が120万人に対して，新しく生まれた子供の数がもう85万人ということがすごく衝撃的であり，3分の2とは言わないが，もう確実に20年後にはこのような減少による少子化がもう目前となってくると，もう充足率云々の話ではなく，全体的に減らすのか，宮城県独自の特色を持った産業教育を大事にするのか，今回の答申の問題だけではなく，10年，20年というスパンで十分に考えていかなければならない印象を強く持った。
- ◎ 非常に小さなことだが疑問がある。数的には少ないが資料の25ページの全日制在籍生徒のところ，普通系専門学科とはどのような学科を指すのか。
- 現在，審議いただいている産業系専門学科は，農業，工業，商業，水産，家庭，看護，福祉を指し，普通系専門学科については，理数，英語，美術，体育，災害科学を指している。
- 全体的な感想としては，本当によくまとめられ，いい答申になると思う。一方で，これを読んだときに現場の者としては大変だと正直思った。このように多岐にわたっていることを，現場の力だけで何とかするというのは，到底無理なことで，いろいろなところから協力を得ないと，この答申が生きるものにはならないと思う。
- 高校のことを考えた場合，入口，それから中での教育，出口と三つ考えなければならぬと思うが，まず入口のところとしては，小・中学校，義務教育への産業教育の理解の促進というところが，私は今回すごく良かったと思っている。そこを県として力を入れて取り組んでいくと本当に良いと思っている。高校の先生方は，大学や専門学校などの説明会に頻繁に参加し，話を聞いている。説明会を聞いた上で，生徒たちの進路希望をどうマッチングさせるかということについて，時間をかけ進路指導を行っていくが，果たして中学校の先生方が，専門学科・専門高校で行っている職業教育に理解があるかと言えば，恐らくほとんど知識がないのではないかと思う。それは専門高校を卒業した方が教員になる数が少ないということもあり，どのような教育が高校で実際に行われているのか，中学校の先生方には本当に分かりにくいのではないかと思っている。それを各学校のオープンキャンパスで行うということは，少し難しいと思うので，これは県全体として考えていけるとありが

たい。

- それから、出口の部分では、本審議会の最初の方で大学との連携や大学に専門高校から一定の枠を設けて入学させられるような方策、それから、県の機関に就職できるようなことを考えてはどうかという意見もあったと思うが、そのような出口の問題というのも難しいと思うが考えられないか。
- 入学後の教育のところについて、この答申（素案）にもたくさん出てきているので一つ一つ、丁寧に取り組んでいくことは必要だと思う。ただし、先ほども話をしたが、学校の立場でいうと本当に難しい。既にできることは全部行っていると正直思う。前回も話をしたが、コーディネーターの問題一つにしても、予算上のことなど、やりたくても難しいところがある。教育課程に縛られることもあるため、地域との連携など、もっと外に出ていろいろな魅力発信ということをやりたいが、時間的に難しいなど様々な制約がある。それから、魅力を伝える方策の中で、例えば産業教育フェアは、これまでずっと行ってきたが、なくなることが決まっており、そのような点では今回の答申に逆行しているし、魅力発信の場が一つ失われてしまったと思っている。その辺りが気になっている。
- 先ほどの学科の名称の問題は、文科省が「家庭」としているため、ここではそのように扱わざるを得ないと思うが、調理や保育、それから服飾と表現すれば、恐らく一般の方々は大変よく分かると思うが、「家庭」というように一括りにした場合に、ぼんやりしてしまい、何をやっているか分からないというところは確かにあると思っている。
- 前回の審議会においても、今現場ではやれることは何でもやっているという意見があり、それを踏まえた上で、今回の答申の素案ができていると思う。ただし、この素案の中身を実現させようとする現場の先生方に随分と負担が増えるという危惧が感じられるという意見であると思う。そのような負担感が感じられないようにするためにどうしたらよいか、この審議会で議論すべきことと考えており、特に第3章の学科の学び方、共通の学びなどでもいろいろな専門の学科があるが、共通の学びのところで、ICT利活用能力の習得など、このようなことについて、各学校で取り組む必要性が本当にあるのかどうか。我々の大学でもいろいろな研修が今、ユーチューブを視聴し、そのあと試験、チェックして何点以上取れないと終わらないというような、これは宮城県に限らない全国共通のことで、情報リテラシーなどは、何も宮城県しかも産業教育でやる必要ということはない訳で、全国共通でそのような取組をしてもらえば、その部分は任せればいい話だと思う。この素案に掲げられている中で、どれを県全体で共通で、しかも現場の先生の誰かが付いてやらなければならないことではなく、生徒自らができることはサイバー空間の中に移行させるなどの工夫をすることで、負担が急に減る訳ではないが、他のすべき業務などに労力を割き易くなるのではないかと思う。そのようなところをもう一度読み直しながら、最終答申まで文章のニュアンスを変えられるところは変えるなどの必要があると、今の意見を伺いながら思った。

- 感想と捉え方の確認の2点。1点目は6ページ，7ページの部分で，在り方について多面的にまとめられているがその通りだと思っている。特に7ページの中段の地域と学校の連携により，コミュニティと繋がる，そして，コーディネート力，ファシリテート力，マネジメント力のスキル向上の必要性が記載してあるが，ここは強く押したいと思い，私も感銘を受けた。そういう中で先生方の負担も多大ということもあるが，フォローする内容も記載されていることから同感である。先月，経験した事例を紹介しますが，冒頭で宮城農業高校と登米総合産業高校の紹介があったが，先月12月に宮城農業高校が日本一おいしいお米コンテストで，2年連続で表彰を受けたということと，東洋水産という会社がスープのコンテストを行っていて，そこで優勝したという報告に来た。高校生10人ぐらいで来たが，その結果も素晴らしいがスープの方は今年実際に東洋水産で商品化するということであった。その成果は素晴らしく，その内容を見て感じたのは，その時のプレゼン能力が凄い。高校生として，私達大人に対して，自分たちの研究成果をきちんとまとめ上げ，伝えるという能力と本当に元気であった。そういうことに感銘したことと，もう少し深く踏み混んで話をすると，決してそのことを生徒だけで取り組んでいるのではなく，地域，例えばトヨタの販売会社や小学校と連携して取り組んでいるということで，地域を見ながらそのような取組を組み立ててきたという報告であった。最後にそのような企画を誰がするのかと訊ねると，キーとなる先生がいて，その先生が生徒に対して，課題提起し，呼びかけてということも併せて聞いたので，正に答申の素案に記載している内容だと感じた。他の高校もこのような取組みをしていると思うが，素晴らしいと思った。私どもの役割としては，そのような取組状況をメディアに発信，外向けに発信したいと今，動いている。また，実はそのキーとなる先生のバックグラウンドは，ある農協の元職員だったと聞いて，素地としてはそういったことも踏まえた人間が，教育現場で良い働きをしていると感じた。特に7ページのところの記載は良いと感じた。
- ◎ もう1点は，読み方，捉え方の確認だが，12ページ13ページの「第4章今後のさらなる少子化を踏まえた産業教育の在り方」の章だが，13ページの③職業教育拠点校という記載について，中身は登米総合産業高校のことが記載され，このような方向についても検討する必要ということだが，少子化を捉えて高校の統廃合もテーマとして検討していくのかという確認である。
- ◎ 資料4の13ページ③にある，最後の文章の方策について，具体的にどのようなことを意図しているのかということである。
- さらなる少子化に伴って，全国各地で統廃合が進んでいる状況だが，一方でその地域に必要な産業教育，専門教育の学びというものがあり，それをどうしていくかという一つの手段として，工業なら工業高校という一つの学校，商業は商業の一つの学校とするだけではなく，新たな視点として学科間の連携なども含め，登米総合産業高校のような職業拠点校ということも一つの方策だということである。

- 言葉で言うと統廃合など使えるかもしれないが、今この答申の中で、統廃合という言葉を使い込む必要があるかという、必ずしもそうではない。恐らくそういう言葉を使わなかったと思うが、誤解のないような表現が必要だと思う。
- 人口の減少というところは、これから避けて通れない部分であると思う。今の学校のそれぞれの立地場所やその地、その地の産業ということから考えると生徒数が減っていくという効率性の議論だけでいいのかというのは何となく悶々と考えてしまうところがある。ではどうしていくべきかというときに、答申の方を拝見して非常に上手くまとまっているという印象は持っているが、課題として挙げているPRの部分や、中学校との連携の部分などを考えると、地域との繋がりをどのように深めていくかというところで少し考える必要があると思った。地域の企業との連携や中学校との連携、それから大学や高専など、要は川上川下と一緒にやって取り組んでいく仕組みがあってもいいのではないか。ただし、これにはキーマンとなる先生が必要になってくるかもしれない。そして、そのような事例をみんなで共有していくことで、少し効果に繋がっていくと感じている。
- それから、PRという部分では、特に中学生に対して将来の自分が見えるようなアピールの仕方ができないかと考える。これまでも農業、工業というネーミングがいいのかということも、実は疑問は持っていたが、文科省が決められたものだとすることであれば、そこはなかなか難しいと思うが、この学びをすると、こういう人物になれるという夢を持たせるような、そういう見せ方、表し方ができれば、これからその道に進んでいく方々も増えるのではないかと思う。
- それから、今、産業界、経済界の中では、リアルとオンラインという学校もそうだと思うし、実際にそれぞれの学校でも取り組んでいると思うが、これをどのように組み合わせて効果的に取り組んでいくか、特に共通カリキュラムが必要だという部分については、先生方の負担を減らす上でも、オンラインをうまく活用していくという手法なども取れるのではないかと思っている。
- 今回事前に資料を読ませてもらった。改めて、この産業系専門高校の県内での就職率が8割であるということ、県内中小企業にとって大きな役割を果たしているということに感謝申し上げたい。前々回の審議会でリカレント教育の話をしてもらったが、現在、コロナ禍ということもあるが、産業界では、大企業のみならず中小企業でも、今後の経営をどうしていくか、或いは先の課題では、DX、カーボンニュートラルなど、大企業のみならず中小企業でも共通の課題認識となっており、我々も議論を進めている。さらに、リカレント教育が、従業員のみならず、経営者にとっても課題になっている。そのような中で、この産業系高校において、どこまで教えていくのかも重要な問題であり、また難しい問題でもあると思っている。今回の答申の素案の中では、基礎基本の徹底や、或いは大学科による汎用的能力の育成としてまとめていることに感謝したい。

- これも前々回話したことだが、高校の卒業生の中でも、就職した後、離職する方も多いと思うが、一方では、本当に県内の企業に定着し、即戦力として魅力的な人材になっている方も多くいる。そういう面において、どこまで高校で教えたらいいいのか、それについては高校でも行っていると思うが、実際に定着率の高い企業の経営者や、或いは幹部の方と会い、今の産業がどういった状況になっているのか、それから高校に対する期待はどのようなものなのかなど、求められる専門性について、直接教育している先生方が会って話を聞く、場合によってはEメールでもいいと思うが、情報交換していくと、全体の教育内容について何かヒントが得られるなど、そのような取り組みをしていただくと大変ありがたいと思っている。
- 今回の答申の素案までの議論と専門委員会で大分、具体的に出ていた意見等を、集約されていてよくまとめられたと思っている。全体として、リカレント教育の話や各学科、専門学科の学びの魅力をどう発信するかという辺りは、前にも話があり、意見も出ていたので、それが盛り込まれていることも良いと思う。また、先ほど話がありましたが、教員の指導力向上について、様々なことを教えるという教育の能力だけではなく、関係をつなぐ能力も必要だということもきちんと記載されているし、7ページの(2)の最後の段落ですが、教員の負担軽減を図りながらと記載され、作業を行ったり、専門人材を配置する必要性について、これも議論がなされたことが記載されているので良いと思っていた。
- 一つ気になったのは、第1回目の審議会で触れたが、今の新型コロナウイルス感染、東日本大震災、先日の津波のこともあるが、リスク管理、危機対応ということについて、どの産業にも必要であることから、専門学科の学びにおいても、体系付けて教科としてやるということはまだ難しいかと思うが、専門高校においても、共通教育的な観点で取り込めないかと思った。今、商業施設、工場、農業現場、学校現場でもみんな大変な思いをして対応していることから、そういう状況を知らせながら、将来の職業人として、どのような対応や態度、行動が必要なのかといったことがあっても良いと思った。どこに入れるのかは難しいが、第3章の各学科における学びの在り方の最後にも何か補足のような形でそのような教育も必要ではないかということを入れてもらえるといいと思った。
- そして、ICT利活用能力は、今の専門高校そのものに求めるのは難しいところで、単に技術の習得だけではなく、そのための人材を置くことや、或いは外部機関の利用を図るということも踏み込んで記載していくと非常に良いと思った。
- それから、言葉の問題で、最初のページにIoTなど記載があるが、AIとかビッグデータ、ICTは大分、慣れてきていると思うが、IoTは分かりにくいので、何か注釈か注記のようなものがあると良いと思った。
- 各学科の学びの在り方の一つ前に、魅力を伝える方策として、理解を深める機会と多様なツールを活用というところで、これまでもいろいろ意見が出て

いたが、これは専門学校も同じで、同じ学科を持つ学校がたくさんあり、どのような違いがあるのかを示すことはなかなか難しい。同じ資格を取らせ、就職先も大体同じようなところに行くということを考えると、他の専門学校と比べて何が違うのかということを経験生にどのように伝えられるのかということに非常に苦労しているところである。専門高校もそのような意味では、中学生や中学校の先生に対して、保護者に対してどのように魅力を発信するかというのは非常に難しいところだと思う。各学校の努力はもちろん必要だと思うが、高校教育課の方でも、公立高校ガイドブック、ハイスクール通信、キャリア教育など出されているが、もう少し工夫が必要ではないかと思っている。例えばキャリア教育などを見ていると10月以降は、就職内定状況がメインになっており、その後は、就職した場合のマナーや社会人としての心構えなどの内容であるが、あれは誰が読むのだろうと見ていつも見ている。高校生に向けての情報提供なのか、高校の先生に向けての情報になるのか、情報や内容を少し可視化し、伝えたいことを明確にするなど少し工夫すれば、各専門高校にもこういう見せ方、作り方があるということを示し、高校側も魅力の発信というものをどう伝えたらいいかなど参考になるのではないかと考えている。

- また、高校ガイドブックには、確かにコンパクトに専門高校、専門学科の説明がされており、進路のところは三行くらいの文章でコンパクトに書いてあるが、それはそれで非常に良いと思うが、それを中学生などが読んだときに、そこに魅力を感じるかと思っている。もう少し具体的にその就職、進学がどういうものであるかということ、具体的に示す必要があると思っている。それから構成の仕方でも専門学科のそれぞれの学びについても、インデックスなどで分かり易くする必要があると思う。ガイドブックのようなものもきちんと魅力を伝えるものにする事で、各専門高校がそれを見て、こういう伝え方をすることが大事だということも出てくるのではないかと考えていた。この魅力を伝える方策ということについては、専門学科・専門高校の学びや職業に対する理解を深める工夫というのは、もちろん各学校が行う必要があるが、高校教育課の方でも示し、その上で、魅力の発信の仕方など、一緒に考えていくということも必要であると考えていた。
- 最後の方に言われた魅力を伝える方策について、ここは重点課題の1つと思っている。提言として出すだけではなく、それがしっかり次年度以降動き始める際に必要があると思うので、もう少し事務局の中でも検討していただければと思う。
- 情報発信の点から、広報誌を作成しており、ものづくり産業で活躍されている特に若い職員を対象とした内容のものを、高校に配布することによって、地元企業、ものづくり企業を中心に就職してもらうように、努めているところである。その広報誌については、一定の評価をいただいていると感じている。答申の関係だが、諮問にあった少子化の進行への対応、それから予測困難な時代に求められる資質・能力の向上ということについて、この辺りにつ

いては、委員の皆様、専門委員の意見を踏まえて答申がなされていると感じている。その中で、例えばICT活用能力の人材育成、それからキャリア教育の充実というところで、これについては、経済商工観光部の方でも、第11次職業能力開発計画を今、策定している。それについて重要な取り組みの中にも位置付けられており、軌を一にしているものと捉えている。例えば、答申の素案の6ページに②次代の産業を担う人材に必要とされる資質・能力の育成という中で、ICT活用能力等を身に付けさせることが重要であると記載があるが、これについては我々産業人材対策課でも重要と捉えており、今、つくっている職業能力開発計画においては、例えば電子商取引など、企業の事業展開で活躍できるIT人材の育成や、離職者に対しても、ITスキルというものが必要になっているため、そのような離職者訓練の中でITスキルに対応した訓練を実施したいと考えている。それから、ICTとかIoTに対応して訓練を行うにあたって、職業訓練指導員のICT教育のための職業訓練指導員のスキル向上についても取り組んでいきたいと思っている。

- もう一つは、キャリア教育の充実というところだが、これについては、答申の素案の10ページに記載してあるが、勤労観とか職業観の醸成というところと、その実施にあたっては職業体験活動や社会人講話などの機会の確保が必要不可欠という記載があり、我々の計画においても関連して高校生を対象とした取り組みの中で、社会人との対話によるキャリア発達支援事業を予定しており、地域の若手社会人から仕事の面白さ、やりがい、それから就職をしたきっかけなど、直接話してもらうことを通して、職業観の醸成等を促進したいということで、産業人材の育成の中で取り組んでいきたいと考えている。
- また、答申の素案の中で、14ページのキャリア形成の変化への対応で、高校卒業後の学びという中で、リカレント教育があるが、この中でリカレント教育の連携の一つとして、当部が所管している高等技術専門校も入っており、高等技術専門校においても、新卒者、既卒者、また、離職者等への職業訓練によって、リカレントやリスキングの機会を提供するとしており、これも重要な施策の一つと位置付けているので、これらを柱に今後も、産業人材の育成・確保、それから県内就職、地元定着の促進のために産業教育の方々とより連携を図りながら、今後も事業を推進していきたいと考えている。
- 最後に参考ということで、ネーミングの話があったが、高等技術専門校の例を挙げると、広告看板科がサインデザイン科という名前に変えたところ、定員を上回った。決して名前を変えたからというわけではないと思うが、これも一つの事例ではないかと思う。今後の高等技術専門校の再編の中では、例えば従来の左官科を左官エクステリア、それから造園科を造園ガーデニングとするなどといった考えもあり、やはりイメージ向上もあるが、具体的に今の若い人にとって何をやっているかイメージできる、分かり易いネーミングというのも重要な点ではないかと感じたところである。
- これまで委員の皆さんから、卒業生などを中心に、産業教育の魅力を伝える

場をつくる必要があるとの意見が多く出されました。当然そこにはロールモデルとして、自分はこの産業高校で学び、卒業してからこういう仕事に就いて今、非常に充実している、将来はこんなことをやりたいなど、例えば技能関係の表彰を受けた人などが話をしてくれると良いのではないかと思います。そのような個別の内容を毎月更新していくといいと思う。例えば宮城県教育庁のウェブサイトから、宮城県の産業教育の情報が全部見られるといったところを、県民の皆さんに伝わるといことが大事だと思う。そのような活動を地道に積み上げることで、評判が高まり、このチャンネル、このYou Tubeを見れば一通り分かるということになるといいと思う。うちの学生に聞いても、今、新聞は取っていないのは当たり前、テレビも持っていない。ほとんどスマホで情報を集めている。これが現実で、そのような中において、中学生や保護者にどのような伝え方がいいのかいうところを絞り込んでいく必要があると思っている。

- 答申の素案の中でも Society5.0 が当たり前の言葉として使われているが、Society5.0は何を目指すのかということについて、注意書きが必要であれば入れた方がいいかもしれない。あくまで経済発展と社会的課題の解決、これをサイバー空間とフィジカル空間が融合して進めるということで、産業教育はそのフィジカルなものづくりなど、また、社会課題を解決する能力、ノウハウ、そのようなことを学ぶ、基礎の基礎を学ぶところだと思う。
- 魅力を伝える方策のところ、どのような免許や資格が取れる、どのようなカリキュラムになっている、高校側で頑張っている情報を整理し伝えるということも、もちろん大事だが、中学生や高校生レベルで見たときに、大学も同様であるが、実際の高校生たちの姿を見て、楽しそうにしている、頑張っている、或いは成長しているという生の姿を見せていくことが大事だと思う。今、私どもの教職大学院に柴田農林高校の先生が研究に来ているので、専門高校の学びの成果をどのように形にして、見える化していくのかということも研究している。特に義務教育など学力状況調査の結果が重視されるが、点数以外のいろいろな力を伸ばしていることを見ていく必要がある。普通科の生徒も点数だけではない、いろいろな力を伸ばしているし、専門高校の場合にはそれが一層重要である。最近、教育学や心理学、あるいは認知科学で、非認知スキルや非認知能力のような言い方をするが、要するに点数で表れるものだけがすべてではないと考える。いろいろなものに対する意欲を持つ、他人と関わる、新しいことにチャレンジしていく、そのようなことをきちんと見える化していくことを、もっと大事にしてほしいと思うので、魅力を伝えるという場合に、生徒たちの生の姿が魅力的に見えるようにしてもらいたいということが一つである。
- また、キャリア教育の話が出たが、義務教育とその専門高校をどうつなげていくか、中学校などで職場体験などを行っている学校も多いと思うが、それも良いとは思いますが、例えば具体的な提案をさせていただくと、専門高校の生徒たちと中学生が関わることを通し、いろいろな仕事について学べる、或いは

それが高校進学の進路選択につながる、中学生にとっても意味があるモデルプログラムのようなものをつくることで、専門高校の生徒の活躍の場でもあるし、中学生にとっても意味があることができたらと感じているので一つだけ具体的な提案をさせていただいた。ただし、それも現場の方にさらなる負担を課すことになることになるかもしれないし、先ほどの話と繋がるが、7ページで専門人材の配置やコーディネーターの配置、コーディネートができるような人が大事ということが出ていたので、これは県の審議会の答申なので、具体化するといいと思っており、覚悟を決めて専門人材のところを県の予算を確保して、本気でそのような人材を現場に配置し、今までも現場の方でやれることはやってきたということなので、それをバックアップするためにも、手厚く支援をしていくということになればいいと思っている。

- ◎ ここで事務局の方から今まで出た中で、何か回答すべきことがあれば回答をお願いしたい。
- まず1点目、注釈等に関しましては、答申の内容が固まった後、注釈を入れるつもりであった。先ほど各学校の方も、様々な取り組みをしているということで、この答申の素案を見て学校の負担という話もあったが、専門委員会の方からは、教員の意識改革という言葉が出ており、これまでも様々なことに取り組んできているが、この答申によって、今後の社会がどうなっていくのか、今魅力の伝え方等も意見をたくさんいただいたが、これまで取り組んでいるからではなく、その取組、様々な視点、観点から変えていくという、意味で記載しているという部分もあるため、決して積み上げ、積み上げということではなく、具体を申し上げると、例えばオープンキャンパスは、これまで中学生と保護者をターゲットに尽力していた。しかし、一向に変わらないということから、今度は中学校や小学校の先生方に産業教育を理解してもらおうという視点も必要など、そのような発想へ転換や自分の学校内や学科だけではない学びなどの必要性などの意見も出てきた。そのような視点で捉えていただきたいと思っている。本日も、貴重なご意見をいただいた。今後も整理、精査していきたいと思っている。

[答申の素案の構成全体について、委員から特に異論はなし。事務局提案については、審議会委員の意見を整理し、答申（最終案）を作成していくことで了解を得る]

### (3) その他

- 次回、開催予定について

## 5 その他

## 6 閉会